

# 篠崎小竹塾の医生

森 川 潤

(受付 2020年11月27日)

## はじめに

活田仲景は、「がくもん おもて 学問に表をかざり、ひと やまひ なお わざ 人の病を治すことを業とすれども、うまれつき げ こん 生質下根にて書物しよもつをみればあくび はつ 吠を發し、しばらく がくもん 少刻も学問ならず<sup>1)</sup>」、や ぶ 医業にたずさわる「野巫医者」の典型である。患家に往診にでかけるが、「みやくは見るまねばかり一向わかるものでなし」、患家の主人は「あの医者坊めが下手のくせに横柄な坊主だ」と心でつぶやく。仲景は、『医道日用綱目』、『療治茶談』、『衆方規矩』といった簡便実用的な処方集を重用するが、それらは「近代名医の作れる和字の医書<sup>2)</sup>」である。江戸後期には、民間の医者ステレオタイプができあがり、技を売る賤業とみなされ、蔑視されていた。

小竹の時代には、文化11(1814)年11月から天保2(1831)年8月までの『輔仁姓名録』と天保3(1832)年正月から嘉永元(1848)年5月までの『麗澤簿』の2冊の入門者名簿がのこされ、翻刻されている<sup>3)</sup>。34年ほどの期間の入門者総数は1488名におよぶ。「門人帳」には、入門者名のほかに、地位や身分、出身地、紹介者名も記載される。「医生」という地位・身分をしめす記述が多くみられる。総数の10パーセントあまりに達する<sup>4)</sup>。

「医生」のなかには、「吉益弟子」、「花岡弟子」などの漢方系医学をめざすものだけでなく、「斎藤方策介」、「緒方弘庵介」などの蘭方医をめざすものもある。「土佐医官」、「信州松本侯医員」、「浜田藩医」などの現職の藩医、「業医」、「医家」などの民間開業医も「医生」にふくめた。

田代三喜が明よりもちかえった李朱医学が近世漢方医学の淵源である。曲直瀬道三は三喜のもとで最新の医学をまなび、16世紀半ばに京都で開業し、学舎啓迪院をひらく<sup>5)</sup>。道三の養子玄朔は、臨床医として名声を博し、天皇家や徳川將軍家にも重用される。曲直瀬の門流は後世派と呼ばれ、その門流の人びとは全国各地で医療にたずさわる。

幕藩体制が整備され、幕府だけでなく、諸藩の組織・制度が整備される過程において、家臣団のなかに専門的な知識や技能を習得した職能集団が形成される。医者も、そのなかに組みいれられ、御殿医、藩医と呼ばれる。譜代藩医の地位を世襲し、一定の禄高が保証されるが、地位・職能により数石から500、600石までの差がある。萩藩では、医者は儒者、書家、絵師、馬医、花挿、碁打などとともに、技芸によって奉仕するものの集団である寺社組に編入され、寺社奉行の配下に組みこまれる<sup>6)</sup>。技能が熟達するものは、手廻組に編入され、手

廻頭の支配下におかれる。藩主の侍医は御側医と呼ばれ、御匙役、副御匙役、御鍼役、外科役の定員 8 人ほどであった。藩医の専門は、本道医、鍼医、外科医、眼科医、口中医の 5 科にわかれる。藩内の交通の要衝に設置された御茶屋、18 の地方行政区画、すなわち宰判の役場である勘場にも、藩医が配置される。江戸、大坂などの藩邸、蔵屋敷にも一代雇の藩医がおかれる。

庶民社会でも、医業にたずさわる人びとがいたが、幕末にいたるまで、医療統制はなかった。藩医とはことなり、町や村で開業する医者は、あくまでも個人の開業医であり、自由に医業にたずさわることができるが、収入は保証されない。生計を維持するためには、かかりつけの医者として患家をかかえなければならない。医者にかかるものがおおくなると、同業者との競合もはげしくなる。

本稿では、漢方医学や蘭方医学の「医生」が、どのような目的で朱子学者である篠崎小竹の儒学塾に入門したか考察する。なお、古代以来の中国医学、近世に独自化した日本漢方は漢方医学と総称し、オランダ通詞、オランダ語医書、オランダ商館医師によりつたえられた医学は蘭方医学あるいは蘭学という表記に統一する。



図 1 篠崎小竹<sup>8)</sup>

## I. 漢方医生

元禄期 (1688~1704) 以降、漢方医学は日本化する<sup>7)</sup>。後世派が医学界を風靡していたが、江戸中期には『傷寒論』を聖典とみなす古方派があらわれ、以後、日本漢方の主流になる。「古方派の祖」後藤艮山の門からは、香川修庵、山脇東洋などが輩出し、京都で開業し、門生をうけいれる。修庵は、伊藤仁斎の門で古学をまなび、孔孟の教えをまなべば、医学の基本原理を修得できると考え、儒医一本論をとる。吉益東洞も古方派に属する。

小竹塾の「医生」のなかには、「吉益弟子」、「安芸良平介」<sup>9)</sup>、「儒医但馬天民介」、「花岡弟子」、「野呂天然塾生」、「原佐一郎介」などの漢方を基盤とする著名な医者や門生もいる。小竹塾の「医生」の主体は、漢方医生である。

「吉益弟子」は、古方派の巨頭として知られる吉益東洞の三男羸斎 (辰) の門生を意味するであろう。東洞の長子の南涯 (猷) は、寛延 3 (1750) 年に京都に生まれ、安永 2 (1773) 年に東洞のあとをつぐ。天明 8 (1788) 年の「京師祝融ノ災」(大火) で焼け出され、大坂船場にうつるが、10 数年後、京都三条東洞院にもどる。大坂の南涯の居宅は弟羸斎が譲りうける<sup>10)</sup>。羸斎は、明和 4 (1767) 年に生まれ、船場で医業にたずさわる<sup>11)</sup>。文化 13 (1816) 年 4 月にはじめてふたりの「吉益弟子」が小竹塾に入門する。

「花岡」は、「臨床第一義とする流派」の華岡青洲<sup>12)</sup>である。青洲は、宝暦10(1760)年、紀伊平山村の医家華岡直道の長男に生まれ、23歳のころ、京都に遊学し、吉益南涯のもとで古方方を、大和見水にカスパル流外科をまなぶ。3年後、父の死没により家業をつぐ。青洲は、再遊した京都では、麻酔薬の研究に専念し、帰国後の文化元(1804)年、京都で創案した通仙散による全身麻酔により乳癌摘出手術に世界ではじめて成功する。青洲の名声をしたが、南紀の僻村に各地から医生が蟄集するが、青洲の弟の鹿城が文化13(1816)年に大坂中之島に合水堂をひらき、医生をうけいれる。



図2 原老柳<sup>14)</sup>

原老柳(老柳佐一郎)は、天明3(1783)年、摂津西宮に生まれ、播州の村上玄齡に師事する。摂津伊丹で開業していたが、たまたま出会った京都の蘭方医新宮涼庭から「診案及処方」が「詳密明晰」であると賞賛され、「大都」で開業するようすすめられる<sup>13)</sup>。佐一郎は、高良斎、斎藤方策、緒方洪庵など「諸家」が蟠踞する大坂にうつり、開業する。篠崎小竹、頼山陽と親交がある。紹介者の数をもっとも多いのは、「医家原佐一郎」である<sup>15)</sup>。

京都は、江戸中期ころまでは、医学研究・教育の拠点であった。京都の儒者である江村北海によれば、毎年、京都に日本各地から遊学する「幾百」の「生徒」のうち、「十二八九ハ医家ノ子弟」である<sup>16)</sup>。北海がみた京都に遊学した漢方医生の日常である。

早朝ニ、先<sup>7)</sup>醫書ノ講席ニ出、還リテ朝飯ヲ喫シ、書ヲトリカヘ、懐ニシテ、儒書ノ講席ニ出、還リテ晝ノ認メシテ、又一席ニ出デ、モドレバ醫書ノ夕講、本草ノ夜會ノ、晝夜講釋ヲ聞<sup>7)</sup>ニノミカ、リテ、讀書ノ暇トテハ更ニナシ

家業をついだり、あらたに医業についたりしようという医生は、京都に参集し、高名な医家のもとで修業し、いわゆる箔をつけなければならない。地元で「醫書」を判読する能力を身につけていないために、毎日、医書の講義、「儒書」の講積など昼夜の講義に忙殺される。医書を読み込む時間もない。「行樂ノ地」京都では誘惑もおおく、「何ヲ一ツトリ得タル事モナク」帰郷するものが「十二シテ七八」もいる。

## II. 蘭方医生

安永3(1774)年の『解体新書』の出板を契機として、あいついでオランダ語医書が訳述・板行される。前野良沢、杉田玄白などの解体新書グループは、「方ありて法なき」<sup>17)</sup>、すなわち漢方医学には薬方はあるが、病理がないことを認識し、蘭方医学にたどりつく。江戸で生まれた蘭学は、江戸に遊学した町医や陪臣医により京都、大坂、各地にひろまる。大坂の蘭

学の基盤は、江戸の大槻玄沢に師事し、寛政3（1791）年ごろに帰坂した橋本宗吉によってきずかれる。以後、大坂蘭学は概ね大槻玄沢の学統系統につらなる。しかし、「当時京阪間、原書未行、概唯講譯書」<sup>18)</sup>、すなわち大坂や京都ではオランダ語医書原書ではなく、おおむね訳書が読まれていた。

医学界の主流は、依然として伝統的な漢方医学であった。蘭方医学は、中国ではなく、「西夷」<sup>19)</sup>であるオランダからつたえられたものである。文政年間（1818～1830）にシーボルトがオランダ商館医として6年間長崎に滞在し、診療活動、臨床医学教育にたずさわり、西欧の医学にたいする関心をたかめる。嘉永2（1849）年、オランダ商館医モーニケがもたらしたジェンナーの牛痘接種法が各地につたえられ、西欧の医学の浸透に決定的な役割をはたす。安政5（1858）年に伊東玄朴が同志とともに設けた神田お玉ヶ池の種痘所は、幕府直轄になり、玄朴は將軍家定の奥医師に任ぜられる。斎藤方策、伊東玄朴のように、市井の蘭方医が一代雇の藩医に登用されるようになる。種痘は、漢方医学の独壇場に楔をうちこむ契機になる。

「門人帳」には、「斎藤方策介」、「岡研介門人」、「小石元瑞介」、「緒方弘庵介」といった記述がみられる。斎藤方策、岡研介、小石元瑞、緒方洪庵は、いずれも大坂で開業し、門生をうけいれる蘭方医である。かれらの紹介により入門したのは、蘭方医学を修学する医生である。

斎藤方策は、明和8（1771）年、周防佐波郡の地下医の家に生まれる。はじめ周防三田尻の能美友庵のもとで漢方医学をまなぶ<sup>20)</sup>。萩藩医の能美家では、友庵の子洞庵、孫の隆庵<sup>21)</sup>だけでなく、学僕青木周弼も三田尻の越氏塾で儒学をまなぶ。方策も越氏塾にかよう。方策は、寛政元（1789）年に大坂におもむき、小石元俊のもとで漢蘭折衷の医学をまなぶ。その後、元俊のすすめにより江戸の大槻玄沢の芝蘭堂に入門する。方策は、寛政12（1800）年ころ大坂にもどり、石津町で開業し、藍塾をひらく。

岡研介は、寛政11（1799）年、岡泰純の第5子として周防平生に生まれる<sup>23)</sup>。18歳のとき、広島の中井厚沢の門にはいり、蘭学をまなぶ。研介は、おなじころ厚沢の門にいた坪井信道とも親交をむすぶ。文政2（1819）年に長門萩で開業するが、「洋学を学ぶには先づ漢学に通ぜざるべからず」と考え、豊後日田の広瀬淡窓、筑前福岡の亀井昭陽に師事する。文政7（1824）年に長崎におもむき、シーボルトのもとで鳴滝塾塾頭をつとめる。文政15（1832）年秋には大坂江戸堀心斎橋北詰の家根屋町に開業する。研介は、斎藤方策の娘と結婚する。



図3 斎藤方策<sup>22)</sup>

小石元瑞は、天明4（1784）年11月、関西蘭医学の開拓者である小石元俊の子として京都で生まれ、寛政4（1792）年のころ篠崎三島に儒学をまなぶ。父元俊に医学をまなび、江戸で大槻玄沢に師事し、文化5（1808）年、父元俊の没後、究理堂をつぐ。元瑞の子「小石中蔵」も天保14（1843）年5月に小竹塾に入門する。親子二代が篠崎父子の梅花社でまなぶ。

緒方洪庵は、文化7（1810）年7月、備中足守藩士の三男に生まれる。文政8（1825）年、父が大坂蔵屋敷留守居役になったため同行し、大坂蔵屋敷に起居する。「学問習武」の日々をおくり、翌文政9（1826）年、中天游の門にはいる。4年にわたり「當時之譯書」を読みつくし、「西學大略」を把握する。天游は「譯書」ではいまだに十分とはいえず、「隔履抓痒」の感がある、として「原書」についてまなぶよう洪庵に命じる<sup>24)</sup>。洪庵は東遊し、天保2（1831）年2月に江戸の坪井信道に入門する。その1年あまりのち、洪庵は『人心窮理学小解』を訳了する<sup>25)</sup>。洪庵は、思々齋塾に入門するまえに、漢文でしるされた医書を繙読する能力を身につけ、オランダ語の基礎を習得していたとおもわれる。洪庵は、宇田川榛齋、宇田川榕菴、箕作阮甫らの指導もうける。天保7（1836）年に長崎に遊学し、天保9（1838）年に大坂瓦町に適塾をひらく。緒方洪庵などの紹介によって入門したのは、蘭方医になるために修業する医生である。

大坂では、小竹の時代には、江戸の蘭方医に師事した「江戸派」が多くなり、シーボルトに師事し、大坂で開業した「長崎派」<sup>26)</sup>の蘭方医もあらわれる。安政6（1859）年のころ、適塾の塾頭長与専齋が緒方洪庵に「東下の志願」をつたえる<sup>27)</sup>。洪庵は、江戸の「某々先生」についたとしても、「日本流の蘭方治療」を見習うだけで、「さして益することはあるへからず」、「足下は長崎に下り蘭醫に就きて直傳の教授をうけ大成を期せらるへし」と長崎遊学をすすめる。洪庵の次の世代は「蘭醫」の「直傳の教授」の時代である。

蘭方にしても、漢方にしても、医学塾での修学の過程において、漢文の訓読法を身につけるよう指示されたり、みずからその必要性を認識した医生が小竹塾に入門する。

高良齋は、医学修業の過程において、小竹塾に入門する<sup>28)</sup>。

十五の歳  
文化十四年戊寅年 即文政元年

高良齋 阿波人

良齋は、寛政11（1799）年に阿波徳島藩の中老山崎好直の庶子に生まれる<sup>29)</sup>。城下に開業する高錦国の養子にむかえられ、13歳のころから養父に家学の眼科学を、本草学を乾純水にまなぶ。良齋は、大坂にのぼり、文化15（1817）年の10月から11月のあいだに小竹塾に入門したとおもわれる。大坂にでたのは、養父の兄である高充国が大坂道修町で蘭方眼科医として開業していたこととかかわりがある。良齋は、ほどなく長崎にむかい、吉雄権之助のもとでオランダ語と西洋医学をまなぶ。文政6（1823）年にシーボルトが出島のオランダ商館に着任すると「シーボルトに親炙」する。シーボルトによれば、良齋は「眼科と日本植物学に

通じ、和蘭語・支那語に巧み」である。良斎が荷をほどく間もなく小竹塾を去ったとしても、親元において「支那語」を修業していた。良斎は、シーボルト事件に連坐し、投獄されるが、天保2（1831）年に解放され、徳島にもどる。天保7（1836）年には大坂にうつり、北久太郎町で開業する。高良斎の子鋭一郎も、天保15（1844）年に「良斎子」として小竹塾に入門するが、のちに昌平坂学問所に入寮し、古賀茶溪、羽倉簡堂に師事し、かたわら川本幸民に蘭学をまなぶ<sup>30)</sup>。慶応元（1865）年には、徳島藩の洋学校蘭学教授になる。

小竹塾には、すでに医業に従事するものも入門する。のちに佐賀藩医学寮の初代寮監になる島本良順（龍嘯）は、文政5（1822）年11月に小竹塾に入門する<sup>31)</sup>。

島本良順 肥前佐嘉 医員 好蘭学

十一月卅日 但馬天民介

良順は、蓮池町の漢方医の家に生まれ、家業をつぐ。その後、長崎におもむき、オランダ通詞猪俣伝次右衛門のもとで蘭学をまなぶ。佐賀城下にもどり、はじめて「佐嘉藩に蘭学を唱え」<sup>32)</sup>、門生をうけいれる。文政5（1822）年に執行勘造、のちの伊東玄朴が入門する。良順は、勘造に長崎で蘭学をまなぶようすすめ、みずからは上坂し、儒医但馬天民の紹介により儒学をまなぶ。天民は大坂で開業する野呂天然の女婿である。良順は、大阪天満で開業したのち、佐賀城下にもどり、開業するが、天保5（1834）年に医学寮が開講すると、寮監として蘭方医学を講じる。良順も、漢籍の判読能力の限界を認識したのであろう。

池田多仲は、入門帳に「医者」と記される。多仲は、小伝によれば、文政3（1820）年に「津和野藩医である池用淳作の長男」に生まれる<sup>33)</sup>。「多仲は十九歳で江戸に出て、のちに伊東玄朴の門人になってから、名を玄仲とあらためた」。「篠崎小門人帳」によれば、天保14（1843）年4月、3人の「津和野藩臣」とともに「池田多仲」が小竹塾に入門する<sup>34)</sup>。

布施七郎 石州津和野藩臣 松永清次郎介

四月三日

平田雄之助 同上

坂邨佐代次 同上

池田多仲 同上 医者

津和野藩主亀井茲監は、天保14（1843）年に、「中老の布施左仲」、「馬廻の平田雄之助」、「医師、堀杏庵、平田玄淑」、「他に町医者で身分の低い池田多仲」、「坂村佐代治」らに大坂、江戸への遊学を命じる<sup>35)</sup>。「藩医」ではない「医者」の多仲は、23歳のころに、3人の「津和野藩臣」とともに大坂の小竹塾に入門したのであろう。小竹塾で修業したのちに、江戸におもむき、伊東玄朴の象先堂に入門する。玄朴は、同志を糾合し、安政5（1858）年5月、神田お玉ヶ池に種痘所をもうける。万延元（1860）年10月、種痘所は幕府直轄となり、文久元（1861）年には西洋医学所と改称され、西洋医学の教育機関になる。多仲は、世話役を命じら

れる<sup>36)</sup>。池田謙斎は多仲の養子である。

文政5（1822）年9月、小泉玄常が小竹塾に入門する<sup>37)</sup>。

小泉玄常 防州上関 長門医員 村尾善五郎介

九月十六日

紹介者「村尾善五郎」は、画家の浦上春琴の弟子である<sup>38)</sup>。春琴は、南画家の浦上玉堂の長男に生まれ、玉堂とともに各地を遍歴するが、文化8（1811）年ころ、周防上関の「村尾善五郎」宅に身を寄せる。頼山陽、篠崎小竹らと親交がある文人である。「村尾善五郎」は、のちに京都の九条家につかえる。「村尾善五郎」も玄常も周防上関に住んでいたであろう。

玄常は、入門した時点で「長門医員」であった。30歳まえの玄常は、すでに周防上関宰判付の藩医であったとおもわれる。玄常については、寛政6（1794）年に生まれたこと、「医学は三田尻の能美玄順（友庵）にまなび」、「儒学は頼杏坪にまなんで詩をよくした」こと、「能美玄順の墓誌銘は玄常の仲介によって杏坪がつくり」、大村益次郎が天保14（1843）年に咸宜園に入門するさい請人になったことが知られる<sup>39)</sup>。小竹塾に入門したことは資料にはしるされない。医学をまなぼうとすれば、体系的、継続的に修業をつまなければならない。たとえば詩文の添削のようなことであれば、断片的で、単発的なかかわりにおいて、教えをうけたり、入門帳に名をつらねることもありうる。玄常は藩医の末端の身であったが、頼杏坪に教えをうけ、関西の詩壇に屹立する小竹の教えを乞うことにより文人ネットワークに参入しようとしたのであろう。

### Ⅲ. 医生の儒学

古代以来、漢文文化圏にくみいれられた日本では、外国語である漢文が学術的な内容を記述する文章であった。学術的な著作はすべて漢文で書きしるされる。「近代名医の作れる和字の医書」にたより、「薬方を四五十つかひ覚ゆ」<sup>40)</sup> ようなものが医業にたずさわったとしても、やがて蔑視され、疎まれるだけである。漢方医をころごすものは、『黄帝内経』、『本草綱目』といった中国の古典的な医薬書、注釈書や研究書を読みこなす能力を養わなければならない。まず、漢籍の訓読法を身につけなければならない。漢文訓読は、一定の規則にもとづき、返り点、送り仮名などの符号をもちい、漢文を読むことである。そ



図4 『黄帝内経』素問註證發微 卷1<sup>41)</sup>

れは、五山の禅僧が朱子学を移植するために考案した訓読法である<sup>42)</sup>。規則と符号の意味さえおぼえれば、容易に漢文を読むことができる。小竹塾では、訓読法をまなぶために四書がおもな教材になる。

訓読法を習得したとしても、難解な漢籍医薬書の内容が理解できるわけではない。

凡（そ）医となる者は、先儒書をよみ、文義に通ずべし。文義通ぜざれば、医書をよむちからなくして、医学なりがたし。又、経伝の義理に通ずれば、医術の義理を知りやすし<sup>43)</sup>。

医者をこころぎすものは、まず「儒書」を読み、その文意を会得しなければならない。「儒書」の文意を把握できなければ、「医書」を講読することもできず、学問体系として「医学」を習得することはできない。「経伝」、すなわち経書やその解釈書の意味内容を理解することができれば、「医術」の意味内容を理解しやすい。医学は、儒学とともに、中国から移植されたものである。医学と儒学は、古代中国という土壌に根をおろした文化的産物である。

江戸中期以降にあらわれる蘭方医と呼ばれる医者は、漢方医学をまなぶうちに、漢方医の党派性・閉鎖性が科学的精神の発芽を阻害する要因であることを認識し、蘭方医学にたどりつく。蘭方医になるためにも、儒学をまなび、漢籍を講読する能力を身につけなければならない。そのうえで、伝統的な漢方医学の知識や技能を習得しなければならない。それは、漢方医学の知識や技能を前提としなければ、西洋医学を理解することが容易ではないからである。たとえば、「症状」や「診断」という漢語を知らなければ、オランダ語の“symptoom”, “diagnose”の意味を理解することはできない。宇田川玄真は、文化8（1811）年、榕庵を養子にむかえるが、榕庵のためにみずから『素問』、『靈枢』などの漢方医書を講じる。さらに、漢方医能条保菴のもとで『傷寒論』、『金匱要略』といった漢方医書を、和泉藩侍医の井岡桜仙のもとで本草学を、幕臣の儒者松下葵岡のもとで儒学をまなばせる<sup>44)</sup>。天保12（1841）年に坪井信道塾に入門した黒川良安<sup>まさやす</sup>は、幼少期から長崎に滞在し、オランダ通詞吉雄権之助のもとでオランダ語を習得するが、漢学を修業した経験がなかったために、弘化元（1844）年、20歳をすぎたころに佐久間象山の家に寄寓し、オランダ語をおしえながら漢学をまなぶ<sup>45)</sup>。

萩藩好生堂は、藩医青木周弼によって西洋医学校に再編成されるが、文久元（1861）年の「好生堂増補規則」<sup>46)</sup>には、「初学之輩は先醫経経方の要素を熟読し、漢術研究之上は洋書に就て勉強講論すへし」と明記される。漢方医学は蘭方医学を履修するための先修科目として位置づけられる。学科課程は訳書課程と原書課程のふたつにわけられるが、「訳書は規模狭隘にして、隔靴之憾なき事能はず、少壯之輩は原書に就て学ぶにしかす」とされる。初学者は、「洋書之義理よりハ文法を研究」し、「語辞暗記、文法會得之上は専ら醫書を研究し」なければならない<sup>47)</sup>。「文法」は、マートシカッペイ文法書、すなわち『和蘭文典』前・後編により習得する。幕末には、漢方医学をまなび、オランダ語文法を習得したのちに専門的な課程に

すすむという蘭方医の修学課程が構想される。

医生は、漢文訓読の方法をまなぶために小竹塾に入門するが、附随的にもたらされるものがある。ひとつは、職業倫理ともいべきものである。小竹の時代にも、医者の中には、「富貴の家」や「権門」に出入りし、媚び諂い、「名利」を得ようとするものが多かった<sup>48)</sup>。しかし、医術は「萬民の生死をつかさどる術」であり、医者は「民の司命と云、きかめて大事の職分」である<sup>49)</sup>。「司命」は「生殺の権を握るもの」(『日本国語大辞典』)を意味する。「医は仁術」である<sup>50)</sup>。「仁愛の心を本とし、人を救ふ」のが使命である。医者は、「病家の貴賤・貧富の隔てなく」、「名利を顧みず、唯おのれをすて、人を救はんこと」が使命である<sup>51)</sup>。

医生が小竹のもとでまなぶのは、儒家古典である四書の解釈学だけでなく、実践的道德である。小竹は、寛政正学派から朱子学の学統をうけつぐ。その学統は、「趨<sub>レ</sub>功利<sub>レ</sub>而舍<sub>レ</sub>道德<sub>レ</sub>」、すなわち「功利」に馳せ、「道德」を捨てる徂徠派<sup>52)</sup>への反撥から生まれる。正学派の「学問」は古聖賢の教えをまなび、「聖人の道」をあきらかにする<sup>53)</sup>だけでなく、道德的修養にとりくむことによって自己を聖賢の境地にまでたかめることをめざす修養の学でもある。医業は、ひとの生死にかかわる重要な職務である。医生は、他の塾生とともに講席につき、医業にたずさわるものの立場から小竹の講釈に耳をかたむける。

もうひとつは、教養である。江戸後期には、都市の町人はもとより、地方の町人や農民のなかには儒学書を手に入れ、自学自習するものも少なくなかった。庶民社会においても、儒学は一般的な教養とみなされていた。医者は、患者や患者をとりまく人びとだけでなく、土地の名士とも言葉をかわす。医者としての知識や技倆をそなえたとしても、儒学という教養がそなわっていなければ、かれらの信頼を獲得することはできない。専門的な職業につくための修業の過程において、自己の職業にたいする自負心も深まる。

大坂堂島界隈に蔵屋敷をかまえる西国諸藩では、篠崎小竹の名も知られていた。大都会大坂に遊学し、著名な文人儒者のもとでまなんだことは、医生にとっても誇らしいことであった。

おわりに

漢文は、研究者の唯一の表現形態である。漢方医書を繙読するためにも、漢文の訓読法を身につけなければならない。オランダ語で記述された医書を判読することは、オランダ語の文章を漢文におきかえる作業にほかならない。既知の知識、すなわち漢方医学の知識が不可欠である。オランダ語医書を訳述するにあいには、当時の学術用語である漢文あるいは漢語のほかに表現方法はない。

三都をのぞく地方の城下町や町では、町儒者が生計の基盤を得ることは容易なことではない。商都大坂では、地方でも名が知られた町医者が医業にたずさわり、医生をうけいれる。

江戸後期には、地方でも医者にかかるものもおおくなる。開業医の競合から抽んでるためにも、三都や城下町に遊学し、名高い医者のもとに入門し、流派や学統につながることで社会的な信頼を得なければならなかった。医師は、潤沢な漢籍医書が架蔵される私塾に入門し、学科課程にそって講釈を聴講したり、塾生同志で会読したりできる。臨床課程も用意される。地方で儒学の基礎をまなぶ機会にめぐまれなかった医師は、「漢学の力がないと、醫者の本が讀めない」<sup>54)</sup>とさとされたり、自覚したばあいにも、塾主の紹介により近隣の町儒者に入門することもできる。小竹は、そうした医師をうけいれ、他の塾生とおなじように儒学を講じる。医師は、儒学をまなぶことによって、漢文訓読の方法を習得することができる。無自覚であったかもしれないが、そこに職業的な倫理、教養といった付加価値も生じる。

本稿でも、多数の人物が登場した。小竹の時代には、街道を行き交う人がおおくなる。師をもとめ、私的に、公的に遊学するものもすくなくない。内村友輔のようなまずしい商人の四男でさえ、街道を往来することによって、漢方医、蘭方医、儒者の門人帳に足跡をのこす。たとえば篠崎小竹を円心とする知的ネットワークは波状にひろがり、あたらしいネットワークを生みだす。

なお、冒頭の仲景は中国で医聖とされる張仲景のパロディである。

## 【註】

- 1) 式亭三馬, 『善悪表裏・人心覗機関』, 国民図書編刊, 『近代日本文学大系』第17巻, 昭和2年, 925頁。
- 2) 『養生訓』巻第6, 貝原益軒, 石川謙校訂, 『養生訓・和俗童子訓』, 岩波書店, 2011年(1961年第1冊), 125頁。
- 3) 多治比郁夫校注, 『篠崎小竹門人帳』, 宗政五十緒・多治比郁夫編, 『名家門人録集』, 昭和56年, 上方藝文叢刊刊行会。
- 4) 「門人帳」に, 「吉益弟子」, 「花岡弟子」, 「斎藤方策介」, 「緒方弘庵介」などと記される門人については, 「医師」と明示されないものも医師とみなした。
- 5) 小曾戸洋, 『新版漢方の歴史』, 大修館書店, 2014年, 160頁。
- 6) 「萩藩の医家に関する制度」, 田中助一, 『防長医学史』上巻, 聚海書林, 昭和59年(昭和28年初版), 230~231頁。
- 7) 『新版漢方の歴史』, 178頁。
- 8) 木崎愛吉, 『篠崎小竹』, 玉樹香文房, 大正13年, 巻頭口絵。
- 9) 『続浪華郷友録』(曾谷学川, 文政6年序)には「眉山 医業 名均字良平通称安芸良平」の記載がある。
- 10) 富士川游, 「吉益南涯」, 『中外医事新報』第903号, 大正6年11月, 1348~1351頁。
- 11) 館野正美, 「吉益東洞『古書医言』の文献学的考察——とくに自筆原稿との校合によって」, 『東洋文化研究所紀要』巻136, 1998年12月, 5~6頁。
- 12) 小曾戸洋, 『新版漢方の歴史』, 大修館書店, 2014年, 190頁。
- 13) 富士川游, 「原老柳先生」, 『中外医事新報』第787号, 大正2(1913)年1月, 50~53頁。
- 14) 藤浪剛一編, 『医家先哲肖像集』, 刀江書院, 昭和11年, 297頁。
- 15) 「解題」, 『名家門人録集』, 199頁。
- 16) 江村北海, 『授業編』(天明3年序), 同文館編輯局編, 『日本教育文庫』学校編, 同文館, 明治44年, 634~635頁。
- 17) 杉田玄白, 『狂医之言』, 『日本思想史大系』64, 岩波書店, 1976年, 234頁。

- 18) 阪谷朗廬撰,「寺地強平先生碑」,五弓豊太郎編,『事実文編』第四,国書刊行会,明治44年,179~180頁。
- 19) 桂川甫周撰,「跋」,大槻玄沢,『蘭学階梯』,天明癸卯季冬「序」,羣王堂,天明8年。
- 20) 篠崎弼(小竹)書,「斎藤方策墓誌」,書写年不明,早稲田大学図書館所蔵。
- 21) 安藤紀一,「雪水能美先生行状及年譜」,『防長史学』第4巻第1号,昭和8年,1頁。
- 22) 藤浪剛一編,『医家先哲肖像集』,刀江書院,昭和11年,273頁。
- 23) 呉秀三,『シーボルト先生其生涯及び功業』,吐鳳堂書店,大正15年(明治29年第1版),670~672頁。
- 24) 「自序」,『病学通論』,緒方章訳述,宇田川瀧・坪井信道序,『病学通論』,出版年不明,河内屋卯助(大坂),早稲田大学図書館所蔵。
- 25) 緒方富雄,「緒方洪庵譯「人身究理學小解」小考」,『中外医事新報』第1165号,昭和5年11月,521頁。
- 26) 中野操,「大阪蘭学史」,『日本医史学雑誌』第6巻第3号,昭和31年4月,91頁。
- 27) 長与専斎,長与称吉編刊,『松香私志』上巻,明治35年,15頁。
- 28) 「篠崎小竹門人帳」,138頁。
- 29) 『シーボルト先生其生涯及び功業』,690~695頁。
- 30) 笠井助治,『近世藩校に於ける学統学派の研究』下,吉川弘文館,平成6年(昭和45年第1冊),1346頁。
- 31) 「篠崎小竹門人帳」,146頁。
- 32) 『シーボルト先生其生涯及び功業』,717頁。
- 33) 深瀬泰旦,「池田多仲について」,「池田家文書の研究」(一),『医史学雑誌』第35巻第3号,平成元年3月,81~83頁。
- 34) 「篠崎小竹門人帳」,184頁。
- 35) 松島弘,『藩校養老館』,津和野歴史シリーズ刊行会,平成12年,27頁。
- 36) 伊東栄,『伊東玄朴伝』,玄文社,大正5年,99頁。
- 37) 「篠崎小竹門人帳」,146頁。
- 38) 影山純夫,「玉堂・春琴と周防大道上田家」,『美術史論集』15,2015年2月,5頁。
- 39) 田中助一,『防長医学史』下巻,聚海書林,昭和59年(昭和28年初版),312頁,426頁。
- 40) 『養生訓』,125頁。
- 41) (明)馬蒔撰,梅壽古活字印(重刊),慶長13年。
- 42) 金文京,『漢文と東アジア』,岩波書店,2010年,73頁。
- 43) 『養生訓』,125頁。
- 44) 宇田川榕菴,『宇田川榕自叙年譜』,出版年不明,書写年不明,写(自筆),早稲田大学図書館所蔵。
- 45) 尾佐竹猛,「黒川良安の事蹟に就て」,『中外医事新報』第1269号,昭和14年7月,267頁。
- 46) 「部寄」文久元年,「毛利家文庫」,山口県文書館。
- 47) 「醫學修業規則」,「御直書控」嘉永三年,「毛利家文庫」。訓点筆者。
- 48) 『養生訓』巻第6,132頁。
- 49) 同上書,124頁。
- 50) 同上書,126頁。
- 51) 「扶氏医戒之略」,緒方富雄,『緒方洪庵伝』,岩波書店,昭和17年,127~128頁。
- 52) 「拙斎遺文抄」,中村幸彦,岡田武彦校注,『近世後期儒家集』,日本思想大系47,328頁。
- 53) 頼春水,『正学指掌』序,天明5年,『静寄軒集』,279頁。
- 54) 高梨光司,「兵部大輔大村益次郎先生」,大村卿遺徳顕彰会,昭和16年,5頁。

Zusammenfassung

Über die Medizinstudenten in der Neokonfuzianische  
Privatschule von Shōchiku Shinozaki

MORIKAWA Jun

Auch in der zweiten Hälfte der Tokugawa-Zeit kann man ohne medezizinische Kontrolle als Arzt praktizieren. Um die Lebensunterhalt zu verdienen, muß man die Konkurrenz mit den Berufsgenossen überwinden. Während der 34 Jahren seit dem Jahr 1814 treten die 1488 Studenten in die konfuzianische Privatschule von Shōchiku Shinozaki in Ōsaka ein. Darunter sind mehr als 10 Prozenten die Studenten der chinesischen (kampō) oder der holländischen Medizin (rampō). Sie sind nicht nur die Sudierenden, sondern auch die praktische Privatärzte oder die Daimyonatsärzte. In dieser Studie möchte ich untersuchen, was für Zwecke sie den Konfuzianismus in der Privatschule von Shochiku Shinozaki studieren.